

文化財保存修復学会の沿革

文化財保存修復学会(旧・古文化財科学研究会)の活動は、昭和8年に滝精一博士の提唱によって発足した「古美術保存協議会」に始まります。戦後にいたって、「古文化財之科学」(柴田雄次編集)を創刊し、昭和50年には会の名称を「古文化財科学研究会」と改め、文化財に関する幅広い研究活動を続けてきました。しかも近年、文化財の科学的研究が盛んになるにしたがい、この分野における草分けともいべき本会に課せられた責任は、ますます重みを加えつつあります。そうした要求に対応するため、本会は平成7年に「文化財保存修復学会」として新たなスタートを切りました。

本会の特長として、物理、化学、生物など自然科学諸分野の専門研究者はもちろん、考古学・建築史学・美術史学など人文科学部門の研究者、文化財保存関係機関の専門家・技術者・博物館や美術館の学芸員、その他文化財の科学的研究に関心をもつ多くの分野の方に参加いただいています。(「入会のしおり」より)

文化財保存修復学会公開シンポジウム実行委員会

委員長 三輪 嘉六(日本大学)
副委員長 村上 隆(奈良文化財研究所)
委員 西浦 忠輝(東京文化財研究所)
杉山真紀子(昭和大学)
村田 忠繁(元興寺文化財研究所)
内田 俊英(京都造形芸術大学)

連絡先

〒154-8533 世田谷区太子堂1-7
昭和女子大学光葉博物館内
TEL 03-5432-0620 FAX 03-5432-0622
E-mail:jsccp@sepia.ocn.ne.jp
<http://www1.ocn.ne.jp/~jsccp>

文化財の保存と修復シリーズ刊行のお知らせ

文化財の保存と修復

何をどう残すのか?

ISBN4-906347-92-4 平成11年11月6日 第1版発行
B5変形判 カラー8頁、モノクロ108頁 本体価格1,400円

何をどう残してきたか 文化財とその保存修復
日本大学 三輪 嘉六

天平文化を今に伝える 正倉院宝物の保存修復
宮内庁正倉院事務所 成瀬 正和

現代に生きる伝統技術 絹絵の修復
岡墨光堂 岡 岩太郎

古代へのロマン 藤ノ木古墳出土遺物の保存処理
奈良国立文化財研究所 肥塚 隆保

飛鳥の名画を永遠に 国宝高松塚古墳壁画の保存修復
東京国立文化財研究所 増田 勝彦

岩のみほとけの心を 現代に 国宝白杵石仏の保存修復
東京国立文化財研究所 西浦 忠輝

阪神・淡路大震災からの復興 旧神戸居留地十五番館の修復
兵庫県教育委員会 村上 裕道

*本書は、平成11年2月7日に行われたシンポジウム「文化財の保存と修復 - 何をどう残すのか?」をまとめたものです。

文化財の保存と修復

博物館・美術館の果たす役割

ISBN4-906347-93-2 平成12年6月10日 第1版発行
B5変形判 カラー4頁、モノクロ108頁 本体価格1,400円

基調講演 博物館・美術館の役割
日本大学 三輪 嘉六

特別講演 保存・修復作業の根底にあるもの
京都国立博物館長 中川 久定

文化財にも人にも優しい施設を 博物館・美術館の環境づくり
東京国立文化財研究所 三浦 定俊

信頼できる修復と安心できる輸送 博物館が抱えるリスク
東京国立博物館 神庭 信幸

捨てられるべきものの保存 文化を記録する生活文化財
国立民族学博物館 森田 恒之

歴史を見せる 広がる地域博物館の役割
群馬県教育委員会 岡部 央

民間であるがゆえに 博物館明治村の悩み
(財)博物館明治村 西尾 雅敏

*本書は、平成11年11月6日に行われたシンポジウム「文化財の保存と修復 - 博物館・美術館の果たす役割」をまとめたものです。

文化財の保存と修復

伝統に生かすハイテク技術

文化財の保存修復における伝統技術と科学技術
横浜美術短期大学 / (財)美術院国宝修理所 西川 杏太郎

紙と絹 ハイテクでよみがえる伝統材料と技術
岡墨光堂 岡 岩太郎(興造)

絵画の修復とハイテク 名画に隠された秘密を探る
国立民族学博物館 園田 直子

見えないものを見る画像処理 国宝日光東照宮陽明門彩色の秘密
東京文化財研究所 三浦 定俊

大和古墳群の科学的調査 巨大古墳に眠る失われた伝統
奈良県立橿原考古学研究所 今津 節生

伝統技法と構造解析 唐招提寺金堂の修理
奈良県教育委員会 今西 良男

よみがえるか古代の大建築 古代出雲大社の復元
東北芸術工科大学 宮本 長二郎

総合質疑応答・討議
コーディネーター・東京文化財研究所 西浦 忠輝

*本書は、平成12年10月7日に行われたシンポジウム「文化財の保存と修復 - 博物館・美術館の果たす役割」をまとめたものです。

問い合わせ先 (株)クバプロ内「文化財の保存と修復」事務局
〒102-0072 東京都千代田区飯田橋4-6-5
TH第4ビル4F
TEL 03-3238-1689 FAX 03-3238-1837
E-mail : bunkakazai@kuba.co.jp
<http://www.kuba.co.jp/>

文化財の

—歴史遺産と環境—

保存と修復

開催趣旨

文化財と「環境」といえば、第1に温度や湿度などの大気環境があげられるだろう。博物館や美術館内の管理された環境にある文化財はむしろ少なく、大半はオープンエアの環境に曝されているのが現状からみても当然である。しかし、文化財をめぐる「環境」を考えるには、これだけにとどまらない広範な視野が必要となる。例えば、現代の都市空間に「歴史遺産」を残していくための周辺整備や、文化財を保存・修復するために必要な伝統的技術を支える人的・物的な支援体制、あるいは、地震、火事などの自然災害への対応など、たいへん多岐にわたる「環境」との「共生」を想定しなくてはならない。本シンポジウムは、「文化財の保存と修復」という観点から、「歴史遺産」を取り巻くこれらの多岐にわたる「環境」について広く論じあい、これからの文化財保護に資することを目的としています。会場からもご意見をおききし、議論を深めていきたいと考えております。多くの方々のご参加をおまちしております。

主催 文化財保存修復学会

後援 文化庁・京都府・京都府教育委員会・京都市・京都市教育委員会・日本文化財科学会・全国大学博物館学講座協議会・国宝修理装₃師連盟・全国国宝重要文化財所有者連盟・京都府文化財等所有者連絡協議会・京都新聞社・朝日新聞社・産経新聞社・毎日新聞社・読売新聞社・NHK京都放送局

会場 テルサホール(京都・京都府民総合プラザ)

プログラム 平成13年11月17日(土)

司会進行 元興寺文化財研究所 村田 忠繁

9:40 ~ 10:00	開会挨拶・基調講演 歴史的環境の保存	文化財保存修復学会会長・日本大学 三輪 嘉六
10:00 ~ 10:50	特別講演 歴史と環境 18世紀後半の日本とヨーロッパを例として	京都造形芸術大学学長 芳賀 徹
10:50 ~ 11:00	休憩	
11:00 ~ 11:30	座長 奈良文化財研究所 沢田 正昭 文化財観光資源と環境 主に遺跡の復元活用に関連して	奈良文化財研究所 田辺 征夫
11:30 ~ 12:00	世界遺産京都の歴史的環境と景観論争	京都府立大学 宗田 好史
12:00 ~ 12:30	伝統的修復技術を取り巻く環境	京都府教育庁 石川登志雄
12:30 ~ 13:30	昼食	
13:30 ~ 14:00	座長 東京文化財研究所 青木 繁夫 地球規模の気候変動と歴史遺産	東京文化財研究所 西浦 忠輝
14:00 ~ 14:30	世界遺産奈良の大気環境	奈良大学 西山 要一
14:30 ~ 15:00	災害と歴史遺産	京都造形芸術大学 内田 俊秀
15:00 ~ 15:15	休憩	
15:15 ~ 16:45	パネルディスカッション	
パネリスト	文化財保存修復学会会長・日本大学 三輪 嘉六 京都府立大学 宗田 好史 奈良大学 西山 要一 京都造形芸術大学 内田 俊秀	奈良文化財研究所 田辺 征夫 京都府教育庁 石川登志雄 東京文化財研究所 西浦 忠輝 奈良文化財研究所 村上 隆

開会挨拶・基調講演

歴史的環境の保存

文化財保存修復学会会長・日本大学 三輪 嘉六

1960年代のなかばからはじまる高度経済成長政策は、こと文化の面でも多くの問題をもたらした。大がかりで無計画な土地開発や国土の激しい都市化の流れは多くの公害問題をおこし、同時に自然破壊や歴史的環境の破壊が進行したのはその一つといえる。

公害は人々の生命や肉体を直接、間接に蝕む問題であるのに対し、歴史的環境の破壊は市民やその社会の精神生活への侵略であった。しかし、そのことを近代社会ではつい忘れがちに過ぎていた。そのため地域の生活環境が歴史的環境とのつながりのなかで存在していることを、多くの人達が認識してくるようになるのは70年代になってからのことである。そしていま環境のもつ文化的側面をどのように後世に継承してゆくか、今日の文化財保存問題の一つとしての取り組みが行われている。自然と歴史が一体となった環境は、住民の精神生活の基盤として、心のやすらぎや地域の新しい文化創造の源泉として保存してゆかなければならないという考え方である。快適な環境、住み心地の良さ、といったいわゆるアメニティーの思想が一層求められているのが現状といえよう。

ここでは歴史的環境の保存経緯をたどりながら、いくつかの問題に触れてみたい。文化財保存の「点」から「面」への展開、住民運動に支えられた町並み保存などは、わが国の文化財保存のなかに歴史的環境の保存という新しい現実をもたらすことになるが、その一方では保存と再生のあり方、あるいは観光公害なども生み出している。このシンポジウムではそうした問題意識のなかでそれぞれのテーマに論及することになるが、それらの基本となる課題に触れてみたい。

特別講演

歴史と環境 - 18世紀後半の日本とヨーロッパを例として

京都造形芸術大学学長 芳賀 徹

別紙に記載

1980年京都大学文学部卒業(日本中世史専攻)。京都府立丹後郷土資料館学芸員を経て現職。

著書に、『京都府の歴史』(共著、山川出版社 1999)、『日本農書全集』(共著 日本農文協 1999)、『三千院の名宝』(共著 朝日新聞社 2000)など。

青木 繁夫(あおき しげお)

独立行政法人文化財研究所 東京文化財研究所修復技術部長。

1972年國學院大學文学部史学科卒業。文化庁文化財保護部美術学芸課、東京国立文化財研究所修復技術部を経て、2001年より現職。

東京芸術大学大学院文化財保存学併任教授。文化財保存修復学会運営委員。

専門は考古資料の保存修復。

著書は、『Stabilization of Archaeological Iron』、『Current Problems in the Conservation of Metal Antiquities』1993、『象嵌された遺物のプラズマによる保存処理について』、『保存科学34号』1995年、『高徳院国宝銅造阿弥陀如来座像の表面に生成する腐食生成物の解析』、『保存科学35号』1996年、他多数。

西浦 忠輝(にしうら ただてる)

1947年生まれ。独立行政法人文化財研究所 東京文化財研究所国際文化財保存修復協力センター・センター長代理(地域環境研究室長)。国際遺跡建造物保存会議石造物専門委員会委員。

東京農工大学卒。1975年東京国立文化財研究所入所。修復技術部主任研究官、アジア文化財保存研究室長、国際文化財保存修復協力室長、国際文化財保存修復協力センター環境解析研究指導室長等を経て2001年7月より現職。

専門は保存科学。現在は文化財保存国際協力事業を担当。中国、タイ、パキスタン、エジプト等で保存修復プロジェクトを推進。国際シンポジウムやセミナーのコーディネーションを行う。

『美術工芸品の保存と保管』、『文化遺産の保存と環境』、『アジア・知の再発見 - 文化財の保存修復と国際協力 - 』、『おもしろアジア考古学』、『文化財の保存と修復 - 何をどう残すのか - 』(いずれも共著)等の著書の他、保存修復に関する論文多数。

西山 要一(にしやま・よういち)

奈良大学文学部(文化財学科)・同大学院文学研究科(文化財史科学)教授。

1971年竜谷大学文学部国史学科卒業。1973年財団法人・元興寺文化財研究所(保存科学研究室)研究員。1985年奈良大学文学部(文化財学科)講師、助教授を経て、1995年より現職。高槻市文化財審議会委員、牧方市環境審査会委員など。

専門は保存科学、特に金属製・木製・石製文化財の科学

的保存、災害や大気汚染から文化財をまもり救済するシステムの構築、東アジアの象嵌技術の研究など。

著書に、『ユネスコの世界文化遺産』、『世界遺産学を学ぶ人のために』(世界思想社 2000)、『シエナ - 中世の息づく町』、『世界遺産と都市』(風媒社 2001)、『大気汚染から奈良の“世界遺産”をまもる』、『保存科学の今そして未来』(奈良大学文学部文化財学科・元興寺文化財研究所 1999)、『地震から文化財をまもる - 阪神・淡路大震災による考古学資料の被災と防御』(編著、奈良大学文学部文化財学科保存科学研究室 1995)、『日韓古代象嵌遺物の基礎的研究』(共著)、『青丘学術論集』8・9集(財団法人韓国文化研究振興財団 1996・1997)、『東アジアの古代象嵌銘文大刀』、『文化財学報』第17集(奈良大学文学部文化財学科 1999)。

内田 俊秀(うちだ としひで)

京都造形芸術大学教授。

1971年明治大学文学部史学地理学考古学専攻卒業、1976年文化財保存修復国際センター科学理論課程修了、昭和53年国立ローマ中央修復研究所終了。

(財)元興寺文化研究所保存科学研究室研究員、京都芸術短期大学助教授、京都造形芸術大学助教授を経て、1997年より現職。

共著者に、『現代美術館学』(昭和堂 1998)、『鋳物の技術史』(社団法人日本鋳造工学会 1997)、『古代青銅の流通と鋳造』(鶴山堂 1999)。

村上 隆(むらかみ りゅう)

独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所主任研究官。

1978年京都大学工学部卒業、80年同大学院工学研究科修士課程修了、1985年東京芸術大学大学院美術研究科修士課程修了、1988年同博士課程修了、学術博士。日本学術振興会特別研究員、奈良国立文化財研究所平城京跡発掘調査部、埋蔵文化財センター研究指導部を経て、飛鳥藤原宮跡発掘調査部。

文化財保存修復学会運営委員・会誌編集委員。日本文化財科学会評議員・幹事。京都造形芸術大学非常勤講師(「博物館実習」担当)。

専門は考古材料科学。文化財保存科学の視点から、金工を中心に材料科学の手法を用いて材料と製作技法の歴史の変遷を追求している。また、文化財の環境や防災にも関心を寄せている。

著書に、『色彩から歴史を読む』(共編 ダイアモンド社)、『博物館の環境管理』(共訳 雄山閣)、『文化財は守れるのか』(文化財保存修復学会編)、『Japanese Traditional Alloys』(Butterworth)、『古代金工における金属接合技術』(『文化財論議』)、『ミクロな眼で探るわが国金工技術の世界』(佛教藝術)、『文化財不可視情報の可視化 見えないものを見る視座』(クパプロ)。

伝統的修復技術を取り巻く環境

京都府教育庁 石川 登志雄

絵画・書跡や彫刻といった日本古来の伝統的な文化財の修復には、伝統的な技術・材料が必要であることは自明であるが、今後新たな技術や材料の開発が不可欠でこともまた言をまたない。その意味で文化財修復の発展の可能性はまだまだ残されていると言えよう。しかし、これら伝統的な修復技術を取り巻く“環境”は、けっして楽観できるものとはばかりは言えない。伝統的な修復技術というものが将来さらなる発展があるとすれば、それは持続可能な



桐製の保存箱の制作現場（選考保存技術前田友斉氏の工房）

文化財の修復環境が維持されるよう心がけなければならない。とりもなおさず常に伝統を革新することであらたな伝統を創造していくことであり、そこにはなによりもまして修復技術にかかわる人々の自覚が求められるのである。

ここでは、伝統的な文化財修復技術を取り巻く環境について、

- 1) 修復や表装の材料の供給
(選定保存技術)
- 2) 文化財修理に当たる修復技術者
- 3) 修理時の温湿度や生物被害などの保存環境(修理 I P M)
- 4) 修理費などの経済状況

などの諸側面から考えてみたい。

4

地球規模の気候変動と歴史遺産

東京文化財研究所 西浦 忠輝

今、地球環境が急速に悪化していることはよく知られています。大気汚染や水質汚濁もさることながら、地球温暖化に伴う地球規模の気候変動が大きな問題となっています。温暖化とそれともなう気候変動の原因、メカニズムは非常に複雑で、十分に解明されていません。しかしながら、現在、長い地球の歴史からはかけ離れたきわめて急速な温暖化が起きていること、そしてその原因が人類の活動であることだけは間違いのないようです。原因が人類の活動によるのであれば、その解決もまた人類によってなされなければなりません。その一つの形が1992年に採択された気候変動枠組条約です。その第3回締約国会議が1997年の地球温暖化防止京都会議であり、そこで採択されたのが京都議定書です。現在、その批准を巡って種々の議論が闘わされていますが、基本理念に立ち帰っての真摯な姿勢が求められます。

さて、歴史遺産の保護という観点から気候変動の影響を考えた場合、一番の問題は、地域環境の変化により、従来なかった大きな劣化要因が発生するということです。たとえば、中国の敦煌莫高窟は1500年以上ものあいだ比較的良好な状態で遺されてきています。脆い砂礫岩からなるこの洞窟群が遺されてきた最大の要因は、当地がほとんど雨の降らない(年間降雨量約30mm)砂漠気候であることです。過去に何回かあった大規模な崩落、劣化は、ごく稀に起きた大雨によるものと考えられています。気候変動により、この地域に頻繁に大雨が降るようになれば、莫高窟は短期間内に崩壊、消滅してしまうであらうでしょう。地域的な気候変動を予測し、事前の保護対策を検討することが必要です。



中国の砂漠地帯にある敦煌莫高窟。気候変動により頻繁に大雨が降れば短期間に崩壊するでしょう

世界遺産奈良の大気環境

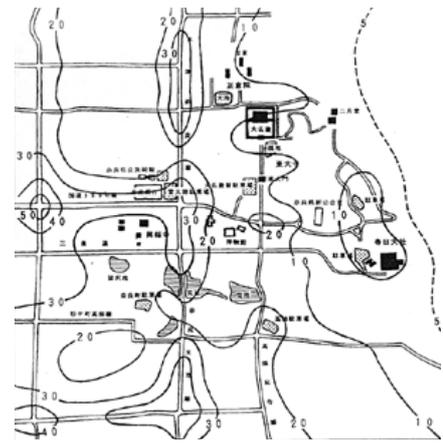
奈良大学 西山 要一

ここ半世紀、世界各地で大気汚染による文化財の損傷が顕著になってきました。ギリシア・アテネのバルテノン神殿のレリーフ(大理石)やイタリア・ローマのマルクス・アウレリウス騎馬像(青銅)、京都国立博物館の多宝千仏(石灰岩)や奈良・東大寺の八角灯籠(青銅)などの野外文化財ばかりか、屋内の仏像や壁画も損傷が進んでいます。

奈良大学では世界遺産に登録された正倉院・東大寺・興福寺・春日大社・十輪院・平城京跡・薬師寺に十輪院・般若寺・奈良大学を加えた9地点で、1989年より大気汚染(二酸化炭素(NO_2)・二酸化硫黄(SO_2)・塩化物イオン(Cl^-))を測定するとともに、金属板(銀・銅・鉛・スズ・鉄)と色彩板(朱・緑青等11色)を文化財サンプルとして大気曝露し影響調査を行ってきました。また、奈良公園・奈良町では、1992年から5回にわたって詳しい二酸化窒素の分布調査を行ってきました。

調査の結果、二酸化硫黄の高濃度の中心は工場群にあって発生源は工場排ガスであること、二酸化窒素の高濃度の中心は国道の交差点付近で発生源は自動車排ガスであること、塩化物イオンの高濃度の中心はごみ焼却場において排煙であることが明らかになりました。そして、文化財サンプルの金属板の錆や色彩の色あせは大気汚染濃度に比例して著しくなることも判明しました。また、奈良公園の樹木林や春日山原生林ではその周辺に比べて2/3～1/2に減少しています。奈良の世界遺産はまさに大気汚染の真っ只中に曝されているのです。

大気汚染から文化財をまもるには、自動車通行量や化石燃料の削減、焼却施設の改善など大気汚染源を少なくする努力が必要です。それとともに、樹木林・原生林の大気汚染防除効果を活用したり、大仏の体に積もった埃に混る大気汚染物質を取りさる東大寺大仏のお身ぬぐいに見られる伝統的保存管理にも学ぶべきことが多いのです。



2001年5月の東大寺・春日大社・興福寺・元興寺など世界遺産周辺の二酸化炭素窒素濃度分布図。各地点とも1993年7月の測定値より10ppbほど高くなっていて、文化財への影響が懸念される。(数次の単位はppb/day)

災害と歴史遺産

京都造形芸術大学 内田 俊秀

災害に巻き込まれた歴史遺産の被害は、平時に受ける規模に比べ桁違いに大きく、その破壊される速度も、同じく桁違いに速い。地震や火災、戦闘行為などは瞬時に破壊する。従って被災した歴史遺産の救援活動と、それに続く保存修復作業は、平時のものとは別に考える必要がある。救援組織は国の内外にいくつか設置されたとはいえ、災害で消滅してゆく数を見ると、まだまだ数、実力共に不十分である。これらについて具体的な活動を紹介し検討したい。

次に、救援活動を円滑に進める意味でも、広く一般の人に歴史遺産の大切さを知ってもらうような日常的活動が大事だ。緊急時に彼らの理解なくしては、活動がスムーズに進まないことも一方にはあるが、あえてこの様な古い文言を呈したのは、1995年の阪神淡路大震災の復興がなった後、多くの神戸市民は新しい街に違和感と戸惑いを感じ、失望を覚えたからだ。街が一変したことで、過去を断ち切れ存在基盤を消失したような不安にも襲われた。もし復興事業が、歴史的景観も復旧する方針をとったならば市民レベルでのこの様な不利益は軽減できたはずだ。それを事前に予測できるわれわれは、緊急時に備える日常的対策の一つとして、関連行政機関も含め広く市民にその理解を求める働きかけを、普段から行う必要がある。

最近のニュースに、敵対する民族や宗教の象徴として歴史遺産を標的にし、破壊する戦闘行為があげられる。これらの防止は民族が対立する原因を取り除くか、政治的妥協を図るか、いずれにしても政治レベルの問題であり、簡単に解決するものではない。しかし危険性が察知された時点で、当該国に入り込み歴史遺産を一時国外退去させ破壊から守ることは可能だろう。外国のいくつかの例を紹介したい。



砲撃で破壊された中世の石橋
(モスタル・ボスニア・ヘルツェゴビナ国)

村田 忠繁(むらた ただしげ)
元興寺文化財研究所。

三輪 嘉六(みわ かるく)

1938年生まれ。日本大学教授。文化財保存修復学会会長。日本大学史学科卒業。奈良国立文化財研究所研究員、文化庁主任文化財調査官、東京国立文化財研究所修復技術部長、文化庁美術工芸化課長、同文化財監察官を経て、98年より現職。

専門は考古学、博物館学、文化財学。文化審議会、文化財分科会の各専門委員、独立行政法人評価委員会委員(文化分科会)をはじめ、各地で文化財の保存・活用についての各種委員。99年から文化財保存修復学会会長に就任。

著書に、『日本馬具大観 ~ 巻』編著、吉川弘文館)、「家型はにわ」(『日本の美術』尾至文堂)、「美術工芸品をまもる修理と保存科学」(『文化財を語る科学の眼 5』国土社)、「Horses in Ancient Times」(『Horses and Humanity in Japan』The Japan Association for International Horse Racing)、「文化遺産危機管理の基本課題」(『1999 台湾集々大地震-古蹟文物震災修復技術諮詢服務報告書-』台湾国立文化遺産保存研究中心)など。

芳賀 徹(はが ・とおる)

1931年生まれ。京都造形芸術大学長。

東京大学教養学部卒。東京大学大学院人文科学研究科比較文学比較文学専攻博士課程修了。文学博士。1955~57年フランス政府給費留学生としてパリ大学に留学。1963年東京大学教養学部専任講師、65年助教授、65~67年プリンストン大学客員研究員、75年東京大学教養学部教授。91年より国際日本文化研究センター教授(併任)。92年東大教授を退官、名誉教授。この間、75~76年ウッドロー・ウィルソン研究所(ワシントン)研究員。国際日本文化研究センター名誉教授。東京大学名誉教授。岡崎市美術博物館館長。

専門は、近代日本比較文化史、比較文学。18~19世紀比較日本文化史、「桃源郷」の文学と絵画(中国、韓国、日本)をテーマとする。

著書に「大君の使節」、「渡辺華山・優しい旅びと」、「明治維新と日本人」、「みだれ髪系統」、「平賀源内」、「絵画の領分」、「与謝蕪村の小さな世界」、「文化の往還」、訳書にドナルド・キーン「日本人の西洋発見」、サンゾム「西欧世界と日本」などがある。

サントリー学芸賞(1981年)「平賀源内」。大仏次郎賞(1984年)。「絵画の領分」フランス政府パルム・アカデミック・オフィシェ勲章。明治村賞(第19回 1993年)。紫綬褒章(1997年)。平成12年度京都新聞文化学術賞(比較文学)。

沢田 正昭(さわだ・まさあき)

独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所埋蔵文化財センター・センター長。

1969年東京芸術大学大学院美術研究科修士課程(保存科学専攻)修了。奈良国立文化財研究所文部技官、同センター研究指導部長を経て、99年8月より現職。

京都大学大学院人間・環境学研究科併任教授。学術博士。専門は文化財の保存科学。現在は中国古墳壁画および塑像の分析と保存修復に関心をもつ。

著書に、「遺跡・遺物の保存科学」『新版古代の日本』第10巻、古代資料研究の方法(角川書店 1993)、「金堂壁画と保存科学技術」『法隆寺金堂壁画』(朝日新聞社 1994)『文化財の保存科学ノート』(近未来社 1997)、「やきものの調査研究法、顔料の調査研究法」『日本の美術No.400、美術を科学する』(至文堂 1999)など。

田辺 征夫(たなべ いくお)

独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部長。

1968年慶應義塾大学文学部史学科卒業。京都大学大学院文学研究科修士課程中退。

文化庁文化財保護部美術工芸課主任文化財調査官、東京国立博物館学芸部考古課長、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長などを経て、2001年4月より現職。

京都大学大学院人間・環境学研究科客員教授。

専門は、日本考古学(都城・寺院史)

著書に、『平城京を掘る』吉川弘文館 1992、『平城京-街とくらし』東京堂出版 1997。

宗田 好史(むねた よしふみ)

京都府立大学助教授。

1982年法政大学工学部建築学科卒業。1985年法政大学大学院工学研究科建設工学専攻修了、1987年ローマ大学大学院都市・地域工学専攻修了、1997京都大学工学博士。1986年イタリア国立地中海地域経済研究所研究員、88年国際連合地域開発センター研究員、93年京都府立大学生活科学部住居学科(現 人間環境学部環境デザイン学科)助教授。

独立行政法人文化財研究所 東京文化財研究所客員研究員。国立民族学博物館共同研究員。

専門は、都市計画、歴史的環境保存。

著書に、『にぎわいを呼ぶイタリアのまちづくり - 歴史的環境と商業政策』(2000年1月 学芸出版社)、『まちづくりの科学』(ぎょうせい 1999年9月)、『ビジター産業に道をとれ - 日本・都市再生への提言』(2000年3月 日刊工業新聞社)、『都市に自然をとりもどす - 市民参加ですずめる環境再生まちづくり』(2000年5月 学芸出版社)など。

石川 登志雄(いしかわ としお)

京都府教育庁指導部文化財保護課主査。

文化財観光資源と環境 - 主に遺跡の復元活用に関連して -

奈良文化財研究所 田辺 征夫

文化財が観光資源として重視されつつある。そこでは、市町村おこしの資源としての価値が求められる。文化財が、観光資源として扱われるとき、すべては「集客」に集約され、それに付随した産業・生活の活性化と経済効果からその価値判断がなされる。

文化財の価値は、人々の歴史認識や美的感覚などと結びついていて、そこからわれわれが多くを精神的・文化的高揚を得る財産として文化財は存在する。本来それだけで十分である。しかしその価値を実体感するために大勢の人々が集うとき観光資源となり、そのことで文化財を取り巻く新たな社会環境が生じる。好ましい場合もまた逆の場合もあり得る。

1. 好ましい環境

- 1) 多くの人が集まることで、その文化財の価値が再認識され、保存のための意識環境が形成される。
- 2) 観光産業が定着すれば、地域での文化財の地位が定着し、安定的に維持保存される。等々。

2. 悪い環境

- 1) 集客を高めるために、道路、観光施設、宿泊施設などの新設が次々とおこなわれ、自然的・歴史的景観が壊されていく。時には文化財そのものにも影響を与えることがある。
- 2) 観光に直接関わりない地元住民にとって観光公害が生じる。等々。

こうした観光資源としての文化財を取り巻く社会環境の諸問題は、日本では村ごと遺跡保存を抱えた明日香村やあるいは大規模遺跡である平城宮跡などに見ることができる。

基本的な問題は、文化財の価値を損なわない、あるいは高めることができる観光資源化ができるかどうかであろう。



朱雀門の復元、世界遺産への登録など、観光資源としても新たな価値を付加された平城宮跡の現況

世界文化遺産京都の歴史的環境と景観論争

京都府立大学 宗田 好史

日本で6位の人口147万人を要する政令指定都市京都は、そのGDPの3割以上を製造業で稼ぐ工業都市でもある。年間4千万人の観光客が訪れるもののそのGDP割合は2割にも満たない。この現代都市の京都は、同時に遷都1200年の古都であり、全国の国宝の20%、重要文化財全体で14%が集中する文化遺産の宝庫でもある。この現代産業都市と古都との矛盾は、京都が姉妹都市とするフィレンツェとは比較できる規模ではなく、大都市特有の困難な課題を内蔵するものである。

京都にとって環境問題とは、自然環境と歴史的・文化的環境に止まらず、市民生活を直接脅かす大気・水質・土壌等の汚染など交通・産業公害問題ですらあり、また観光公害も顕著である。この中で、自然・歴史的環境については「景観論争」として度々市民の議論だけでなく、多くの国民的関心と呼んできた。1960年代前半の京都タワー問題が第一次、70年代の古都保存法、市街地景観条例等が制定された第二次、80年代末からの京都ホテル・駅ビル問題の第三次景観論争である。近年では依屋隣接のマンションの他、常に物議をかもしりクルート・コスモス社の事件など論争は続き、都心部の町家街区再生を巡る町並み審議会での論争等、第四次も始まりつつある。

それぞれの時代ごとに、限られた地元関係者、京都の一般市民、そして国民的関心と少なくとも三つの異なる関心領域から、京都の文化遺産論が展開された。この間に文化遺産の意味も変遷し、市民の環境への関心も変わっている。この経緯から、歴史遺産と環境の問題を探ることができる。近年までは、市民生活・生産活動と歴史遺産、あるいはその周辺での観光が乖離していたと言われるが、現在ではその距離が急速に縮まり、町家ブームにも見られるように、市民が身近な歴史遺産に高い関心を持ち、その保存への取り組みが急速に広がってきている。歴史遺産は、もはや一部知識人の争点ではなく、広く市民一般の活動領域になってきた。



全国的にも注目された依屋と隣接するマンション



高層マンションが建ち並び都心の町並みが今も変わろうとしている